

木野工

檻

らんる

褸

檻

らんる

樓

木

野

工



© Takumi Kino, 1972,
Printed in Japan

檻らん
樓る

昭和四十七年六月十五日印刷
昭和四十七年六月二十日発行

定価六〇〇円

著者 木野きのの工たくみ

発行者 佐藤亮一
発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一
電話東京二六〇局一一一(代)
振替 東京八〇八

印刷 大日本印刷株式会社
製本 株式会社大進堂

△落丁乱丁本はお取替えいたします△

檻
(らんる)
褻

一章

雄冬^{おふゆ}の苦小屋を出てから、もう五日も経っていた。

花には、いま自分がどうしてこの女たちと二人の男と一緒に旭川の駅に降り立ったのか、たった五日間のことが混じり合って、どの日にどんなことが起ったのか、どんなことが約束されて、自分の体がどんな風に扱われてゆくのか、それさえ判然^{はつきり}とはせず、考えつめることもできなかった。

「さあ、旭川だ。お前たちが贅沢しながら面白おかしく暮せる街だ」

北海道では名の通った周旋屋^でという馬場周旋所から、遙々と雄冬の果てまで、花の母親^{やましん}を尋ね求めて来たのだという出帖場^{ちようば}の山伸^{やましん}が、鋭い目で六人の女たちを睨み据えるようにそう言っ
て降りると顎をしゃくったとき、花は初めて、自分が旭川のどこかに売られて来たのだという
実感が湧いた。

女たちの一人が旭川の町並みが車窓に見え始めると急に泣き出した。あとの四人は新しく自分の
住む町がどんな雰囲気を持っているのかを窺うように、車窓から身を乗り出すようにして

「あっ、兵隊が、オイッチニ、やってる」

などと燥^{はしや}いでいた。近文^{ちかぶみ}をすぎて旭川へさしかかったあたりで、七師団の兵隊が市街戦の演習

でもやっているらしく、しきりと走り回っているのが花の目にも入っていた。そう言われてみて、深川で留萌線から函館本線に乗り換えてから、これが兵隊さんかと思う不思議な服装の男たちを何人も見ていたことを思い出した。深川からは長い剣を下げた若い立派な男も一緒に乗った筈だったが、列車の同じ箱には見当らなかった。

花にはこの身売りの旅が初めての汽車だった。一等と二等の区別のあることも、兵隊に将校という別階級のあることも勿論知らなかった。

山伸が何か言い含めるような小声で、泣いている娘の肩を抱いて話をしていた。この道に何年の悪徳を積んでいるものか、この男には危険な女、つまり逃亡や自殺の恐れのある女はこの泣いている娘ひとりと判断がついていた。こういう状態に置かれた時、切迫した表情で改めて悲観の挙措を見せる女は、時に衝動的な行動に出易いことを経験から知っていた。ちょっと見には勉るような付添いぶりながら、左手でその娘の二の腕を鷲づかみに握っていた。

花だけが中型の柳行李をしっかりと胸元に抱えていたが、他の五人の女たちは、女物とも思えぬ古びた風呂敷包みをそれぞれ一つずつ抱えているだけだった。花の抱えている柳行李はもう柳のむき身のあの白さをとうに失って薄茶色に褪せていた。旭川の埃っぽい駅に降り立つと、その柳行李にしみた潮の香が、なつかしく花の鼻に漂って来た。

「なんだか磯臭えな。折角の別嬪が磯臭えんじゃ、二割方安値に叩かれらあな」

山伸が、花ではなく、連れの男にそう毒づいたのを聞いて、花は狼狽して両袖でその柳行李を覆っていた。連れの男は増毛から一緒になった土工募集の馬場の外稼ぎだった。この世界では募集人と呼ばれている流れ者の周旋屋で、大所の周旋屋の看板を一時仮に使わせて貰い、都会の

失職者や土木工事の現場から土工夫を集めて来ては、出帖場と呼ばれる大きな周旋屋の出張先へ売り渡すのを仕事にしていた。

募集人の男は、ちょっと山伸に会釈をして、長池組と印の入った半纏を着た中年の男のほうへ小走りに寄って行った。片ふところ手の男が募集人の挨拶を鷹揚に受けながら、ひと言ふた言、何か説明を聞いていたが、急に居ずまいを正すように半纏の襟を直しながら

「これは山伸さん。どうもお見せしまして。結構なタマをぞろりとお連れなんで、つい」と追従笑いを浮べて挨拶に寄って来た。

馬場の本業はむしろ土工の募集だった。本店と呼ばれる馬場周旋所は街の中心街にある勧工場
の蔭になってはいたが、六十畳の大部屋が師団通りに面していて、事務所とは裏で連なり、この大部屋が普段は質流れもののセリ売り場に使用れ、土工が大勢一挙に入って来ると一夜の監獄部屋にも早替りした。

山伸は、ニシン場の引揚げ時を見計らって、浜益から石狩へかけての不漁漁場を狙って出張っていたのだった。ニシンは大豊漁だった。しかし、古平、余市あたりはもちろんのこと銭函から浜益あたりにかけてまで、多くの網元は今年もまた一発にかけた勝負に敗れていた。かつての千石場所には考えられないほど、漁こそ一応は盛況に見えても、網を下ろす費用と出稼ぎ漁夫の労働力は問題にならぬほど下っていたし、それに反して漁夫のものいりはふえる一方だった。それが、漁夫を周旋して来る悪質な仲介人たちの搾取によるものだとかわかっていても、どうしようもなかった。それでも何とかと、はかなく繋いでいた賭への期待は、信じられないほどの速度で年北上して行くニシンの群れに、やはり裏切られた。

漁夫を入れて来た周旋人たちにとって、ここがまた絶好の餌場でもあった。途中で逃亡する漁夫をつかまえて私刑と甘言とで土工に応じさせる手もあったし、賃金不払いにつけ込み、遊興に誘いこんで不当に高い遊興費を立替え、そのままそれを土工応募の借金に振りかえたりもした。不漁漁場や、倒産やそれに近い網元が出たとなると、周旋人がどこからともなく腐臭を嗅ぎつけて群がって来た。漁夫たちは、自棄の気配もあって、酒と女には実にあつ氣なく引かかった。一夜の遊興が三年くらいの年期に化けることは珍しくもなかった。

山伸と長池組の出迎え人との話は簡単についたらしかった。

「それじゃ、現地へ行く出迎え人の手配だけすましたら、すぐ本店の帖場へ顔を出して貰いたいな」

「へえ」

「わかつてるだろうが、多少の無理はかかつてる。今夜すぐ発つんだぜ。留萌を素通りで、増毛までは船だ。出迎え人は五人に一人の割でつけて貰いてえ」

山伸はそれだけ言くと、片手を上げて駅待ちのハイヤーを呼んだ。旭川が七師団の増強で急に膨れ上ったとはいえ、ハイヤー会社はまだ二社しかなかった。中村自動車と大きく車体に社名を入れたその車に、山伸はそれまで執拗に握りしめていた娘の腕をとって、先ず乗せようとした。

娘が誰にともなく救いを求めるような恐怖を面上に浮ばせて、半顔で振り返ろうとしながら、抵抗とも言えぬほどの軽いあらがいを見せた。山伸は、にこやかな笑いを取戻してはいた。しかし、片膝で蹴込むように娘を車内に投げ入れた。三人定席に補助席もある客席ながら、六人の女は倒れこむように押し入れられた。山伸は、運転助手席を譲らせて、前に乗った。

自動車に乗せられて、花も他の女たちも驚きを越して呆然としていた。しかし、この自動車賃も、何倍かになって借金に加算されることを知らずにいるのは花ひとりだけのようだった。

「邪魔くさいね、こんなもの」

倒れこんだ女のひとりがそう言つて、つい手離れた花の柳行李を日和下駄で踏んづけた。行李はまるで空のように踏み応えもなく、下駄の下で醜く押しつぶされた。そして、女六人がつめこまれて異臭のたちこめかけた車内に、またしても磯の香を漂わせた。

古びた柳行李は、すぎが花の手を引いて、雄冬岳の麓を海岸沿いに歩いて作次の許へ、家とは名ばかりの、流木を拾い集めて作次が継ぎ足し継ぎ足して漸く小屋の体裁を整えたばかりの苦小屋へ、誰一人付添いもなく嫁入りして来た時の、たった一つの荷物だった。

それは小学校へ上る前年、大正九年の、まだ雄冬岳も浜益岳も雪に覆われていたニシン場前の季節だった。

花には、すぐニシン場へ出稼ぎに出た作次の記憶も、その小さな苦小屋での作次とすぎの生活もまるで記憶には残っていないが、すぎがその柳行李を自身で担ぎ、荒磯を踏み越えて雄冬の山裾を歩き渡つて来たときのことだけは、はっきりと憶えていた。

すぎにとっては、短い、束の間の幸せながら、命がけでその荒磯を渡つて作次の苦小屋に着くまでの、朝から日暮れまでの一日だけが、一生にたった一度の、期待に胸をはずませた幸福な日だったに違いない。

陸路は男の足でも無理、ともっぱら海路が使われていた雄冬の離れ小屋へ、すぎは僅かばかり

ながらも借金を踏み倒して、増毛のはずれの曖昧屋から足抜きして来たのだった。だから、海を渡することは危険だった。

日和下駄に踏みつけられた柳行李には、花のただ一枚の晴着とも言ふべき赤い花模様の浴衣と、洗いざらしの仕事着や、継ぎ当てにでも使うよりほかにしようのないぼろ布、それに花が浜に出るときに、小屋を出るまで着ていたモンペや半纏が入っていた。一枚の浴衣は、花がベニエビの思わぬ収獲で五円もの大金を手にした時、浜益の盆踊りにでも行つて来い、と作次が買って来たものだった。花は、その浴衣にすぎの締め古した細紐をしめて、踊りの雑踏にもまれて来た。それは、花のたった一度の花開いた青春の一夜だった。浴衣はその貴重なメモランダムだった。

そのほかに入っている物は、漁師の娘の仕事着というよりは、力仕事に出る出^で面女の作業着だった。それでも、着替えの分は、きちんと洗い張りされ、高価な着物のように折り畳んでおさめられていた。それだけでは柳行李がいかに中型でも、がさがさに空いていた。

しかし、こんなものでも、花には大切な衣裳だったのだ。想い出や記念の品物としてではなく、たとえ娼家に働くことになろうとも、女には、いずれこんなものを着て働く場所と時間があるに違いないと思っていたのだった。

車は先ず本店に寄った。親方の馬場が帖場の芳夫を連れて玄関の土間まで検分に出て来た。

山伸は周到だった。これから先の、女たちがそれぞれの妓楼に手渡されるまでの僅かな日時の間にも、万が一の逃亡ということもあった。ここで、芳夫さん、と一種畏敬のやさしさをこめて呼ばれているその若い帖場に引合せておけば、万一の場合にも山伸が手引きしたり小細工したと

いう疑いを受けずにすむ。あとは芳夫の指図に従えば、女六人を集めて来ただけの歩合は間違ひなく手に落ちる。

「今夜は脇帖場の二階に泊めろ」

馬場がじろりと仕入れた女たちを眺め渡して指図した。

脇帖場とは通りを二本ほど越した飲み屋街の奥まった小路にある支店のことだった。ここは、もっぱら娼妓、酌婦、女中など、女の口入れを扱っていた。その二階には三十畳ほどの大部屋と三畳の小部屋が二つある。逃亡のおそれがないと見た鞍替えの女たちなら、普通は、やはり馬場のいきのかかった宿に泊めるのだ。そして、ほんの短い自由の日を女たちの言い放題に我儘させる。それは土工の一夜の歓楽のようなもので、宿でも十分に女たちから絞れるものは絞り取るためだ。鞍替えして行く女たちもそれは承知している。ここまで来れば、借金が二十円や三十円ふえたって、どうせ一生この泥沼から足を抜けないのは同じだと不貞腐れにも似た諦めを持っているからだ。

しかし、素人からこの世界に売られて来る娘たちのほうがむしろ恐ろしい。元手も余計かかっている上に、必死の逃亡がとんだ手間と費用を招くことも往々あるからだ。だから脇帖場の二階は、いわば軟禁の部屋である。三畳の部屋が見張りの男たちに使われることも多いし、時には別の目的に、つまり仕入れたタマの検分に使われたり、無理強いに証文に印判をつかせる脅迫と拷問の部屋に使われたりもする。

目と鼻の先なのに女たちは再び車に乗せられた。

身につける物は抱え主が按配あんばいすることになっていて、周旋屋が費用として抱え主たちに負担さ

せることはできない不文の定めがあったが、旅費と宿泊費、食費は分相応なものは抱え主が負担させられた。そして、それはそのまま借金として女たちに課せられて行く仕組みである。花は二百円の契約金で五年の年勤めという証文を取られて売られて来た。

法規上は抱え主と本人、親権者の直接契約というのが建前だった。しかし、どこの土地でも、周旋屋の主が保証人とか身許引受人の名義で、その契約を代行していた。二百円のうち、募集費とか手数料とか、さまざまな名目で五十五円ほどは先取りされていた。

それが馬場の店の収益になるものか、山伸のふところに入っているのか、そんなことは花にはどうでもよかった。花には二百円も的大金が自分のからだにかけられた空恐ろしさだけが纏わりついて離れなかった。それでいて、すぎの手に実際にはいくら金の山伸から渡されたのかも知らなかった。二百円で五年の年勤め、ただそれだけを経文の棒読みのように何度も何度も胸の中で繰り返していた。

山伸が、念のために、と抜き読みを読んで聞かせた証文の内容も、花にはよくわかっていなかった。ただ、その道では散々に苦勞して来ている母のすぎが

「山伸さん、それじゃ一生この子は抜けられないわね。掛りを借金に残すことはやめて、一年のお礼奉公で全部きれいさっぱり、ということにして貰えないかね」

そんなやりとりも他人事のように聞いていた。

年勤奉公で入った場合には、その期限が来れば契約金だけの貸借は消える。食費は、特別に町へ出ることもあつて勝手な飲み食いでもする機会があれば別だが、一応は抱え主が負担する。その他、衣裳から夜具、調度、日常の必需品は抱え主が用意することになっている。しかし、

それは最低の、限度ぎりぎりのお仕着せで、少しでも客を余計に取ろうとすれば必要なものはいくらでも買ってくれるのが例だったし、また、自分ではこれで十分と思っても、どんな衣裳などは作らされてしまう。そして、それは契約とは別扱いの借金として積まれて行く。その費用が、何百人に一人かの幸運で身請け話ができた時には、そのまま身請人の負担にかぶせられてゆくし、年期が明けたときには、新しく歩合の契約でその店に縛られ、こんどは年期中や、その前の諸掛りまでが借金として初めて表面に出され、それをからだで少しずつ返済してゆく形をとる。だから、若い、客のつく盛りの年頃の女なら店は惜し気もなく費用を注ぎこむ。そして、元をとる前に、積算された借金にあくどい歩増しをして、他へ転売してしまう。女の稼ごと、自然の理で身につけた金利稼ごとを、妓楼の経営者たちはうまく使いこなしているのだった。

すぎは、山伸に対するとまるで別の女に一変したように、花には見えた。膝までしかない木綿の絆かすりの仕事着の下には、ご祝儀の配りものを縫い合せた半襦袢を着ているだけのすぎが、片膝を立てて

「ねえ、山伸さん。あたしにも弱みはあるよ。弱みがありゃこそ、こうして花をお前さんに渡すんだ。でもねえ、あんまり阿漕あこぎに過ぎやしないかえ、お前さん。足抜きした女郎にだって、五分の魂はあるよ。お前さん、いい死にざまはしないよ。ねえ、どうなんだね」

と、片手をふところに入れたまま、薄い莫蔭もくえんの上で、つつつと山伸ににじり寄ったとき、花は思わず目をそむけた。

母親の内股がすっかり丸見えだった。すぎはそんな姿態には頓着なしに、山伸につかみかから

んばかりの威勢のよさで啖呵を切りながら、襲いかかるように寄り迫って行った。山伸が思わず後ずさりしたほどだった。

しかし、結局その条件はどうにも山伸の一存では左右し得ないものだと言はついた。

そして、花の身代金や契約の条件はそのままだが、七十円というすぎの手取り分に山伸が二十円の祝儀をつけることで話をつけた。

「お前のおっかさんてのはな、北海道の周旋屋なら知らぬ奴のない食わせもんだ。いまごろは、どっかで叩つ殺されてるかも知れねえ」

花が吉川楼の抱えになって二年目の冬、それが直接には花の死を招くことになった飯場への遠出泊りに出るとき、募集人の組長格たる出帖場から、いわば支店帖場とも言うべき脇帖場に出世していた山伸が、ふと洩らしたその言葉を聞くまで、花は母のすぎがまだ作次と一緒に、あの冬の苦小屋で細々とながら、何とか漁師を続けているものとばかり思っていた。

しかし花が山伸の手で旭川の中島遊廓に売られた時、すぎも同時に我と我が手で、夕張の曖昧屋へ我が身を売りつけていたのだった。それ以外に、一生に唯一度、本気になって自分を救い出そうとしてくれた男への恩返しを考えることの出来ないすぎだった。

その年の作次は本当に思いつめていた。右目は完全に失明し、左も赤い爛れが洗っても洗っても拭えぬほどに眼疾は悪化していた。働きずくめの四十年という歳月が、小柄な作次を筋骨の逞しい、精悍な老人に仕上げてはいたが、六十半ばに達した作次の体力は女盛りのすぎにも劣って

いた。

その作次が、最後のト旗をと資金づくりに強盗の相談まで持ちかけたのだ。

「俺は、やってみる。浜益の本家では十日ごとの人夫賃を買付帖場の与助に担がせて、増毛からこの浜伝いに運ぶのを俺は知ってるんだ。町へかかるのはどうしたって日暮れになる。お前が、こちらで声でもかけて一ト休みさせてくれ。一杯入れてやれば、酒に目のない与助のことだ、うまく行くと夜にかかる。まごついたらお前にも花にも迷惑はかけねえ。まごついた時は、俺の一生の終りだ。そのまま海へへえる」

すゞは止めもしなかった。

しかし、万にひとつも与助襲撃が成功する目算のないこともわかっていた。

そして、その時に、作次のために何としてでもゼニは作ってやろうと決心したのだった。

増毛の町を出外れても、十軒足らずの漁師小屋が小さな部落をつくっているところが小半道に一つくらいはあったし、その間にはぽつんと除け者のように灯をともしている一軒屋も点在している。自分で発見した磯の漁場を、獲りつくすまでそこに住みついているのだが、それらの漁師から獲物を集めて歩く現地問屋の一つが本家と呼ばれていた。

本家では、ほとんどは船で部落や漁師を回り、概算で手付けを渡しておいて、与助が十日に一度か月に二度くらいの割で、その精算かたがた増毛から陸路をやって来る。

これまでに海の事故で仕入れた荷を海に流してしまったことは何度もあったが、陸路の事故はなかった。

作次は、これが最後、とその年の人入れに賭けていた。

自分ではもうニシンの群衆に対抗できる体力の無いことを知っていたからだ。

「ことしこそ府県に帰るぜニつくってみせる」

大正の中頃からは内地という言葉が普通になっていたが、作次は意固地に府県と言い続けている。内地という言葉からは反射的に外地という言葉がわき、それが自身を流れ者と自認させることになる。そんな反応が、北海道へ渡ってもうすぐ三十年、いつも絶え間なく日常の生活に起っているほど、作次は惨めな思いに責められ続けていた。

ニシンの北限が江差沖から岩内あたりだった時期に、作次は、いわゆる一ト旗組で渡って来た。すぎも花も作次が『府県』とはよく言いながら、その故郷が何処かを遂に明かされたことはなかった。

暗く陰惨な若い時代を経て来ているすぎは、作次にも何か自分と同じような灰色の影を感じてはいた。それだけに、進んでそれを聞き糺そうとしなかったし、その必要もまるでなかった。すぎにとっては、束の間でも、自分をまともな女として扱ってくれる男が目の前に現われ、その男と一緒にいてどうなっていくのか、予測も樹たなければ行末の計も樹てられなかったけれども、とにかく一緒に生きているのだという実感だけが大切なのだった。

だから、普通の平凡な生活の中に埋もれている男や女たちにとっては、そんなことまでして、と考えられる女の出稼ぎも、すぎにとっては、それが作次のために稼いでやれる自分の能力の中では一番収入の多いものという理由だけで、少しも不自然ではなかったし、不倫の行為でもなかった。

作次はニシン場どきになると、それまで食をつめてまで貯えてきた僅かな貯えは無論のこと、